

研究ノート

南フランス・ガール県南部のロマネスク聖堂（3）

－プサルモディからソミエール周辺まで－

中川久嗣

Les Églises Romanes dans le Sud du Département du Gard :
Psalmodi et alentours de Sommières

NAKAGAWA Hisashi

Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les chapelles, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent au sud du département du Gard, surtout les vestiges de l'abbaye de Psalmodi et alentours de Sommières. Ce pays correspond approximativement à l'ouest de l'ancien diocèse de Nîmes, et aujourd'hui au sud de l'arrondissement de Nîmes. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

本稿ではガール県南部（現在のニーム郡 Arrondissement de Nîmes）のプサルモディ（コミューンとしてはサン＝ローラン＝デグーズ）からソミエールとその周辺地域に点在する中世のロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを訪問・調査し考察を加える。

取り扱う聖堂は、ロマネスク期とは言っても厳密な時代の限定はせず、11-12世紀のいわゆる盛期のロマネスク期を中心として、その前後の時代もゆるやかに含めたものである。聖堂全体がロマネスク期のものから、大なり小なりその時代の部分が残っているもの、建築様式がロマネスク様式をとどめているもの、そして現在では遺構となっているものなども含まれる（なお建築の一部分がロマネスク期のものとなると、その数は非常に多くなり、その全てを網羅することは難しい。結局はロマネスクの部分がどの程度残っているのかによるのであるが、その選択が多少とも恣意的なものにならざるを得ないことはあらかじめ断っておく）。

聖堂の配列は、おおよそ現在の行政地域区分に準じて整理することとし、ガール県の県番号（30）、大まかな地域、そして自治体（Commune）の順で番号を付した。同一のコミューンに

複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。名称については、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。教区教会については、いちいち名称に「教区」を付けることはしていない。「abbatiale」は通常「修道院附属教会」「修道院附属聖堂」などの訳語をあてるが、本稿では「修道院教会」とした。また「prieuré」についても、わが国では「小修道院」と訳すことが多いが、本稿では個別的名称を記す場合を除いてそのまま「プリウレ」と記してある。「chapelle」は、聖堂内にあるものは「礼拝室」とした。身廊内部のベイは、西側から第1ベイ、第2ベイという順に数える。また聖堂の壁面やピラストルに付けられた円柱（あるいは小円柱）については、特に断らない限り、独立円柱ではなく壁付きの「半円柱」である。

採りあげる聖堂は、そのほとんどが筆者が直接訪問・調査したものである。ただし私有地であったりアクセス困難な場所にあるなどの理由で訪問調査できなかったものには▲印を付した。それぞれの聖堂についての参考文献・資料などの参照情報は、各聖堂ごとに記したが、全体を通してのビブリオグラフィは最後にまとめてある。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ (<http://nn-provence.com>) で閲覧可能である。

30.3.7a サン=ローラン=デグーズ/サン=ローラン教会

(Église Saint-Laurent, Saint-Laurent-d'Aigouze)

エグ=モルトから県道 D979 を北へ約 9 キロである。エロー県との県境であるヴィドゥルル川 (le Vidourle) 沿いであって、カマルグ湿地帯 (Petite Camargue) の西端に位置する。この教区教会は、サン=ローラン=デグーズのコミューンのほぼ中央にあって、20 世紀になって整備された円形闘牛場が南側に隣接する。この村の歴史は 5 世紀頃の西ゴート時代にさかのぼるが、本格的に住民が定着して人口が増えたのは、ここから南へ 4 キロにあるプサルモディ修道院 [30.3.7b] とその活動（主に製塩活動）に依拠するところが大きい。サン=ローランも、もとはこのプサルモディ修道院傘下のプリウレの附属聖堂であった。12 世紀にはプサルモディ修道院のカルチュレールにその名が現れる。南フランスの他の多くの聖堂と同様に、16 世紀の宗教戦争で大きな被害を受け（とりわけ 1562 年）、その後再建されるも、さらにカミザール戦争によって部分的に破壊された（1703 年）。18 世紀から 19 世紀にかけて、壁面やヴォールトそして鐘楼など、聖堂の各部分に継続的に修復工事の手が加えられ今日に至っている。

後陣は北東方向を、扉口が開くファサードは南西方向を向いている。そのファサードは 18 世紀前半にバロック様式で再建されたものである。上下二段になっており、一番上の三角形のペディメントの中央には丸窓の名残である円形の枠組みが残されている。ファサードのすぐ東南側に立つ鐘楼も同じ時代に作られている。3 ベイからなる身廊部とその東に続く内陣のベイも 18 世紀以降に再建された。南北両側には、内部のベイに合わせて、それぞれ 5 つずつ扶壁が並ぶ。北側外壁の西から 4 つ目の台形扶壁が最も強固なものである。内陣および身廊東側の 2 つ

のベイには半円頭形の大きな窓が開けられている。

身廊の東には、その身廊より少し高さの低い内陣のベイが続き、さらに高さが低い東端（正確には北東端）の後陣に至る。全体的に長年にわたる修復と改修の手が加えられているものの、身廊から後陣にかけてが、12世紀ロマネスク期の雰囲気は今によく伝えるものとなっている。後陣は半円形で、中石材がきれいに積まれている。東端上部に半円頭形の窓が開き、その真下に台形の扶壁が付けられている。扶壁は南北両側にも放射状に付けられており、南側の下部には近代になって方形の出入口が開けられてしまっている。内陣のベイの南側には隣接する闘牛場で使用するためのトリル（牛を引き出す前に一時的に留置するための小さな建物）が付けられている。

聖堂の内部は、3ベイの身廊と1ベイの内陣、そして半円形の後陣から構成されるが、内陣と後陣の間には壁が作られていて、後陣は今は聖具室となっている。したがって内陣の東側の壁は平面形である。身廊のベイには交差リブ・ヴォールト（1765年）が架かる。室内は、壁面や横断アーチ、側壁のピラストル、凱旋アーチなど、すべて近代になって彩色されたり壁画が描かれたりしている。凱旋アーチには聖杯をはさんで向かい合う2人の天使の絵が描かれている。

Bibliographie :

Clément (1993) p.67; RIP.



30.3.7a Saint-Laurent-d'Aigouze

30.3.7b サン=ローラン=デグーズ/プサルモディ修道院

(Abbaye de Psalmodi, Saint-Laurent-d'Aigouze) 遺構、privée

サン=ローラン=デグーズから県道 D46 を南へ約 4 キロである。ヴィストル川 (le Vistre) を越えて 200 メートルほど南へ行くと、道路の左 (東) 側にプサルモディの敷地に入る門が現れる。修道院の遺構はその門からさらに 200 メートル先である。ただしこの敷地は私有地であるので、門から中には入ることができない。

この場所には、4世紀頃まで古代のウィラがあった。1979年には4世紀末頃の石棺が見つかっている。正確な時期は不明であるが、プサルモディ修道院は、これまでは5世紀頃にマルセイユのサン=ヴィクトール修道院によって創建されたものとされてきた。聖ペトロ、聖ジュリアン、聖フェリックスの3人の聖人に捧げられ、プサルモディのサン=ピエール修道院などとも呼ばれた。カマルグの西端にあたるこの場所は、ローヌ川や地中海にも近く、古くから漁業や製塩にとって都合のいい場所であった。プサルモディという名前は、この修道院ではつねにい

つも詩篇の朗唱が行われていたからなど説明されることもあるが、正確なところはよく分からない。「Psalmodie」あるいは「Psalmody」と表記されることもある。

創建以来、近隣の司教たちあるいは歴代の国王や教皇などによる保護を受けてきた。8世紀初めにイスラームによる襲撃を受けて被害を受けるが、ピピン（3世）やシャルルマーニュなどの助力によって再建された（創建されたのはその時であるとの見方もある）。8世紀末にはシャルルマーニュがプサルモディ修道院の所領を確認する特許状を与えたことでこの修道院の威光が高まったが、その文書は10世紀に作られた偽書だとされている。いずれにせよ、この時期のプサルモディの活動は活発で、所領の他に傘下に収める修道院や聖堂を次第に増やしていった。近くではサリネルのサン=ジュリアン礼拝堂〔30.3.11〕などがその例の1つである。9世紀初めには、シャルルマーニュの三男ルイ敬虔王（在位 813-840年／皇帝ルートヴィヒ1世）が引き続き保護を与え、第2代修道院長テオドミウス（Theodomius）の時、プサルモディ本院には140人もの修道士がいたとされる。これはヨーロッパでも最大規模の修道院の1つであった。9世紀半ばには、やはりシャルル2世禿頭王（西フランク王在位 843-877年／西ローマ皇帝在位 875-877年）がプサルモディに特許状を与えて保護を継続している。

10世紀に入ると、プサルモディは再びイスラームに襲撃されて荒らされる。909年のシャルル3世単純王（在位 893-923年）の証書には、プサルモディの修道士たちが、本院を放棄してマルシラルグ（Marsillargues／現エロー県）のすぐ西にあったサン=ジュリアン・ドゥ・コルネイヤン（Saint-Julien de Corneillan）に避難したとの記述が見られる。またプサルモディの傘下にあったジョンセル修道院（abbaye de Joncels／現エロー県、ロデヴの西およそ18キロ）に避難したとも言われる。しかしこのジョンセル自体もイスラームによる被害を受けている。こうして10世紀の間はプサルモディの修道士たちの避難生活が続き、本院は荒れ放題のまま半ば廃墟化した。その世紀の終わり頃によく修道士たちが戻り初め、1004年には、修道院長ワルネリウス（Warnerius II）の主宰のもと、何人もの封建領主や司教たちといった有力者がプサルモディに集まって会合を開き、修道院の再建を決めた。その会合には、プロヴァンス伯やトゥールーズ伯、ニーム司教、ユゼス司教、サン=ジール修道院長などの姿が見られたという。そうした有力者たちの支援もあって、ほどなく再建された修道院は、11世紀後半には一時的にマルセイユのサン=ヴィクトール修道院の傘下に入るが、あくまでも独立を志向するプサルモディは、1099年に教皇ウルバヌス2世（在位 1088-1099年）によって聖座直属とされた。

塩田経営が順調であったこともあって、12世紀から13世紀初めにかけてがプサルモディの最盛期となる。修道院の敷地の中には、最も多い時で24もの建物があつたとされる。1102年には、現在のボーケールのコミューン域内にあるサン=ローマン修道院〔30.3.3f〕がプサルモディの傘下に入っているが、このようにプサルモディは12世紀の間にも所領や付属の修道院・聖堂を次々に増やし続けた。最終的には90もの修道院、プリウレ、聖堂を傘下に収め、アルプスからピレネーに至る「プサルモディ帝国」（J. Dodds）とでも言いうる一大勢力を誇ったのであつた。12世紀半ばにはその繁栄を象徴するかのよう、これまでのものよりもさらに大きな聖堂（ロマネスク期の聖堂）の建設が開始されている。

ところがそれにもかかわらず、12世紀後半あたりからプサルモディの財政は悪化し始めた模

様である。新聖堂の建設工事も財政難によって一時的に中断している。リュネルのユダヤ人から借金をしたり、所有する村を売却しているし、また 1209 年にはサン＝ジルのテンプル騎士団がプサルモディの借金の肩代わりをしている。そうした財政難のためであろうか、1248 年にはプサルモディは、南に約 5 キロ離れた土地を国王ルイ 9 世に譲渡した。地中海に通じる小さな古い港のあったその場所に、国王はエグ＝モルト（Aigues-Mortes）の街と新たな港を建設した。この譲渡は、プサルモディの歴史の中で最もよく知られるエピソードであると言われる（P.A.Clément）。

15 世紀からは本格的な衰退が始まる。敷地内の多くの建物も放棄された。修道院の規律も弛緩が進み、教皇パウルス 3 世（在位 1534-1549 年）の時、1537 年について修道院は世俗化された。修道士たちは、その資産ともども散り散りになった。プサルモディはエグ＝モルトの聖堂参事会のコレジアルとなり、さらに 17 世紀終わりにはアレス大聖堂のコレジアルに統合された。1704 年、カミザール戦争のさなかに火災に遭う。カミザールたちは修道院教会の中にわらを積み、誘拐してきた 2 人の カトリックの娘に火をつけさせたとも言われる。火災の後には、プサルモディは廃墟化の一途をたどり、近隣住民が住宅などを作るための石切り場となってしまった。さらにフランス革命勃発後の 1790 年、土地と残された建物は国有財産として売却された。1970 年代になってからは何度か大規模な発掘調査が行われている。

現在のプサルモディ修道院の遺構は、農家の敷地の中にあって、ロマネスク期の聖堂の身廊南側の壁の一部（東西の長さ約 27 メートル）が、その農家の建物の壁としてかろうじて残されている。修道院が創建された時のカロリング期の古い聖堂（いわゆる「*église A*」）の遺構は、その壁面から 25 メートルほど西にあたる位置に見つかっている。初期キリスト教時代のものと思われるヒト形墓地に取り囲まれる形で建てられていた（特にトランセプトの東側）。東西に延びる身廊部（単身廊形式で、天井は木製であったと思われる。外側に扶壁はない）の東側に南北方向のトランセプトが続き、そのトランセプトのさらに東側には主後陣とその左右の小後陣が並ぶ三連式である。中央の主後陣の外側は平面形、内側は馬蹄形（半円形に近い）となっている。左右の小後陣は外側も半円形である。この最初期の聖堂の建設年代は、おおよそ 8 世紀終わりから 9 世紀頃とされている。イスラームの襲撃を受けた修道士たちの避難が 909 年のことなので、少なくともそれ以前であることは確かであろう。主後陣の外側が方形（平面形）となった三連式後陣の平面プランが、ちょうど同時期に創建されたと考えられているアニアヌのノートル＝ダム修道院教会（Notre-Dame d'Aniane、エロー県、当時のものは現存せず）と似ているとされる。それ以外にもヴェゾン＝ラ＝ロメヌ（Vaison-la-Romaine）、ヴァルカブレール（Valcabrère、オート＝ガロンヌ県）、ブナスク（Venasque、ヴォークリューズ県）などとの類似も指摘されることがあるが、これらはもう少し時代が下って 10 世紀末あるいは 11 世紀初め頃のものである。

プサルモディのカロリング期の古い聖堂「*église A*」は、11 世紀初め頃に火災に遭ったようで、その後そのまま同じ場所で新たに建て替えられた（いわゆる「*église B*」）。トランセプトと北側の小後陣、身廊南側の壁は取り壊された後に再建され、北側の小後陣は、その再建の際に、より小さなものに取り替えられた。この聖堂は、やはり長いトランセプトとその東側に

外部が方形の主後陣と半円形の小後陣が3つ連なる形、そして石積みなどの様子が、11世紀前半のほぼ同じ頃に建設されたヴォジーヌのサン＝バルテルミー教会（Saint-Barthélémy de Vaugines、ヴォークリューズ県）と類似しているとされる。何よりもヴォジーヌのこの修道院は、プサルモディによって創建されたものであった。

プサルモディが最盛期を迎える12世紀半ば頃になって、より大きな規模の聖堂建設が開始された。このロマネスク期の聖堂は、それまで

のカロリング期の聖堂を包み込む形でさらに東側に拡張され、長さ70メートル、幅35メートルの3廊式のものであった。ヴェゾン＝ラ＝ロメヌを思わせる3連式の後陣は、多角形の大きな主後陣と、その左右にやはり多角形の小後陣が並ぶ。そして3つの後陣は、それぞれ各面の境に扶壁が付けられていた。後陣の西側はトランセプト様のベイとなっており、そこに建てられていた柱は一辺約3メートル四方の大きなもので、J. Doddsらは、その上に鐘塔を建てるためのものであったと推測している。さらにそのベイの西側には、クロワトルがあったと考えられているが、これについては分からないことが多い。

12世紀のこの新しい聖堂は、その建設時期だけではなく、分厚い壁面やその外側に付けられた扶壁などが、ロマネスクの特徴を表しているものと考えられる。しかし、現在農家の建物の北側の壁となっているこの聖堂の南側壁面（長さ27メートル、高さ15メートル）には、方形の柱が組み合わされたピア（複合柱）に半円柱が付けられたものが2ヶ所にあり、さらにそのピアおよび半円柱の柱頭部分から上に立ち上がるリブ・ヴォールトの一部が残されていることから、プサルモディのこの新しい聖堂が、ロマネスクからゴシックへのまさしく移行期（言わばロマノゴシック様式）にあたる建築であったことが見て取れるのである。この立面構造とリブの分枝は、例えばル・トールのノートル＝ダム＝デュ＝ラック教会（Notre-Dame-du-Lac, Le Thor、現ヴォークリューズ県）のものと似ているとされる。ル・トールの建設は12世紀終わりから13世紀初めのロマネスク後期に属するが、その身廊の天井はゴシック様式である。ただし、ル・トールの場合、ピアに付けられた半円柱は見られない。しかしいずれにせよ、北フランスからのゴシックの波及がプサルモディやル・トールに認められるのである。

Bibliographie :

Bonnery (2010) pp.104-105; Borg (1971) pp.63-70; Clément (1989) pp.218-224; Clément (1993) pp.65-67; Devic et Vaissète (1872) pp.506-510; Dodds et al. (1982) pp.335-336; Dodds et al. (1989) pp.7-55; Morel (2008) pp.56-58; Pérouse de Montclos (1996) p.470; Provost et al. (1999) pp.635-636; Remensnyder (1995) pp.267-269; Shaffer (2009) pp.5-18.



30.3.7b Abbaye de Psalmodi

30.3.8 ル・ケラール／サン＝テティエンヌ教会（Église Saint-Étienne, Le Cailar）

ル・ケラールはサン＝ジルから県道 D6572 で西へ約 22 キロ、リュネルからは県道 D34 でマルシラルグを経て東へ約 10 キロに位置する。サン＝ローラン＝デグーズ [30.3.7a] からだと県道 D979 を北へ約 7 キロである。サン＝テティエンヌ教会は、コミュニオンを南北に貫くエミール・ゾラ通りに面している。この地は、ケルト時代にはニームと同じくヴォルク・アレコミク（ウォルカエ・アレコミキ）族による定住があった。ローマ時代については詳しい歴史は分からないことが多い。中世の間はヴィストル川を行き来する塩を運ぶ船の中継地点であった。村の名前が史料に初めて現れるのは 7 世紀後半である。それ以後は城塞のある場所として知られるようになる（城は現在の村の墓地の北側にあったが、宗教戦争期に破壊された）。

サン＝ジル修道院がこの地に創建した傘下のプリウレは、878 年に史料に登場する。このプリウレの聖堂であるサン＝テティエンヌ教会の建設は 11 世紀とされるが、その名前が最初に現れるのは、1119 年の教皇カリストゥス 2 世（在位 1119-1124 年）の教書においてとされる。1270 年、第 8 回十字軍に出発する際に国王ルイ 9 世（サン＝ルイ）がこの地に立ち寄り、サン＝テティエンヌ教会に鐘を寄進している。その後ル・ケラールのプリウレは、1369 年にはモンペリエの聖ベネディクトゥス修道院の管理下に移され、聖ベネディクトゥス修道院がカテドラルとなると、その聖堂参事会の管轄となった。16 世紀の宗教戦争によって破壊され、17 世紀に再建されるも、今度は 18 世紀のカミザール戦争において火を放たれた（1703 年）。ルイ 9 世が寄進した鐘も、カミザールのリーダーであったジャン・カヴァリエによって打ち壊された。

現在残るサン＝テティエンヌ教会の最も古い部分は 12 世紀にさかのぼる西ファサードの扉口だけで、身廊や後陣そして西ファサードの両側に立つ方形の大きな鐘塔と小塔は 17 世紀以降に再建されたものである。西ファサードの向かって右側の大きな方形の鐘塔（17 世紀）は、最上部に鐘を吊すための開口ベイが、西面と南面には 1 つずつ、北面と東面には 2 つずつ開けられている。高さの低い小塔（18 世紀）の方は、最上部の各面に小さな方形の窓が開けられているが、今は全て埋められている。小塔の中には聖堂の屋根に登るための階段が作られている。この小塔の頂部はドームとなっている。身廊の南北の外壁には、身廊内部の両側に並ぶ礼拝室の壁面と、その上半円頭形の窓が開く壁面が続く。後陣は五角形で、その各面の間には 4 つの強力な扶壁が最上部まで立ち上がる（身廊との境に付けられた扶壁も含めると計 6 つ）。後陣の中央の面には窓はないが、その両側および南北の面には大小の大きさの異なる窓が開けられている。ただしこれらは先にも触れたように、全て 17 世紀以降の再建によるものである。

西ファサード扉口は 12 世紀のロマnescク期のものである。木製の扉の左右両側には、基壇の上に小円柱が立つ。その小円柱の上にある柱頭は左右ともに古代風のアカンサスの葉飾りで、角部にヴォリュート（渦巻き）が付けられている。これはこの近くではサント＝コロンプ（[30.3.6b] サン＝ジルの西）の身廊の柱頭とよく似たものとなっている。ル・ケラールでは、柱頭の上にはそれぞれ冠板がインポストのように左右に向けて横に延びているが、そこにはパルメットが連なる唐草（巻葉）文様が彫刻されている。この左右の冠板の端から大きなアーキヴォルトが立ち上がる。このアーキヴォルトは 4 つのヴシュールからなり、内側の 3 つはシンプルなモールディング形式であるが、一番外側のヴシュールには 3 条線の組紐が「8」の字形で



30.3.8 Saint-Étienne du Cailar

連続する唐草文様が彫刻されている（ただし向かって右端の2つのクラヴォーだけは円形の2条線の中に花びらが開くパルメット文様となっている）。このアーキヴォルトの冠板部分と外側のヴシュールに見られる組紐文様は、エスタジェル（[30.3.6c] 現在はパリのルーヴルにある）の扉口彫刻を思い起こさせるものである。なおアーキヴォルトの内側には、近代になって刻まれたと思われるギリシア十字と、聖堂に捧げられた文字が刻まれている（解釈は難しい）。また扉口の上部には、水平のモールディングのすぐ上に半円頭形の窓が開けられ、一番上はバラスターが並ぶテラスとなっている。

17世紀の聖堂内部は単身廊形式で、身廊の南北両側に礼拝室が並び、その上にトリビューンが作られている。礼拝室と身廊の間には半円アーチが架けられている。身廊の天井は木造である。後陣は五角形で、6つのリブによって分けられた半ドームが載る。南側の中央の礼拝室には洗礼盤が置かれているが、これもまた新しいものである。

Bibliographie :

Bardy et al. (1966) pp.24-25; Buholzer (1962) p.129; Clément (1993) pp.191-192; La base Mérimé : Église Saint-Étienne; RIP.

30.3.9 ガラルグ＝ル＝モンテュー／サン＝マルタン教会

(Église Saint-Martin, Gallargues-le-Montueux)

リュネル（エロー県）の北東およそ8キロである。すぐそばには、ラングドックからスペイン方面に向かうオートルート（高速道路）A9のインターチェンジ（no.26）がある。また西に2キロ行くと、ヴィドゥルル川沿いにあるガロ＝ローマ時代のオッピドゥムで、紀元前1世紀頃には古代ドミティア街道の宿駅でもあったアンブリュスム（Ambrussum）の遺跡がある。ガラルグ＝ル＝モンテュー自体もドミティア街道沿いの集落であった。7世紀頃にはカロリング期の古い聖堂（現存せず）を中心に集落が形成されていた。集落の封建的所有関係はその後は複雑に推移するが、アルビジョワ十字軍が終わってしばらく経った13世紀終わり頃に、国王フィリップ4世（ル・ベル）の所有地となる。14世紀にはボーケールのセネシャル（国王代官）

が集落を取り囲む城壁を建設した。その後もこの地は代々の国王から特許状を得て保護された。1404年には、マジオルカ女王イザベラ（1世）がここガラルグ＝ル＝モンテューで亡くなっている（墓所はペルピニャン）。宗教戦争期には他の多くの街や村と同様に、カトリックとプロテスタントの両陣営によって争奪が繰り返された。

サン＝マルタン教会は、今の村役場（mairie）が面する旧市街のクドゥリー広場から西へおよそ250メートルである。ファンフォーム＝ギレーム通りから北に30メートル入ったところに建っ



30.3.9 Gallargues-le-Montueux

ている。宗教戦争の後、建物の大部分は17世紀後半に再建されている。4ベイからなる単身廊形式で、第4ベイは、南北両側に小さな小後陣が付くトランセプトとの交差部となっており、最東端には半円形の後陣が続く。西ファサードは中石材の積まれた飾り気のない壁面で、中央下部に方形の扉口が、そして切妻（三角形）となった最上部には大きな丸窓が開けられている。身廊外壁には各ベイの間に外部と内部にそれぞれ扶壁が付けられている。身廊南側の第2ベイに古典様式の大きな扉口が付けられている。柱頭に人面が彫刻された左右のピラストルの上に三角形のプロクン・ペディメントが載り、さらにその中央には、植物文様の柱頭彫刻を持つ小ピラストルにはさまれた半円頭形のニッチが立ち上がる。ただし現在そのニッチには立像などは何も置かれていない。第3ベイには高さのある方形の鐘塔が立ち上がる。18世紀初頭のものである。この方形の鐘塔の西面上部には、宗教戦争の後、半ば要塞化されたことを思わせるコルボーが作られているのが見える。

サン＝マルタン教会で12世紀ロマネスク期の部分は、東端にある半円形の後陣である。その壁面は中石材と小石材が交互に層をなして積まれている。中央には隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。またその窓の左右両側には、2つつ細くて高さのある壁付きの小円柱が並んでいる。それら小円柱の基部は円形のトルスである。

聖堂内部は、壁付き円柱（西端は方形のピラストル）とその上に載る半円形の横断アーチで区切られた4つのベイからなり、各ベイの側面はロマネスク的な半円頭形の壁アーチが付けられ、その中に半円頭形の隅切りされた窓が開けられている。ただし第1ベイのみ、2階席のトリビューン構造となっている。そのトリビューンの下には半円頭形のニッチの中に洗礼盤が置かれている。身廊の天井は南北側壁に付けられた水平のコーニスの上に半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かる。このコーニスは南北両側がトランセプトとなっている第4ベイのみ、高さが少し低くなっている。後陣は半円形で、水平のコーニスの上に半ドームが架かる。トランセプトの東側は半円形の小後陣である（ただし外からは見えない）。南側のトランセプトには聖具室への出入口がある。第3ベイの北側には天井に交差リブ・ヴォールトが架かるゴシック様式の礼拝室がある。

P.A.Clémentによると、ガラルグ＝ル＝モンテューのサン＝マルタン教会は、それ自身が傘下の

付属聖堂を所有していた。1つは現在のエロー県ヴィルテル (Villetelle) にある古代遺跡アンブリュスムのアンブロワ橋 (pont Ambroix) の上に建てられていたノートル=ダム礼拝堂 (現存せず)、もう1つはやはりヴィルテルのサン=ギロー教会 (Église Saint-Guiraud) である。後者はガラルグ=ル=モンテューとともに、フランス革命までニーム司教区に属していた。

Bibliographie :

Clément (1993) p.290; Ott (2002) p.68; Rivals (1920) pp.31-47.

30.3.10 ソミエール/サン=ソヴール城塞礼拝堂

(Chapelle castrale Saint-Sauveur, Sommières)

ソミエールは、ガール県とエロー県の県境であるヴィドゥルル川沿いに位置するこの地域の歴史ある中核都市で、現在の人口はおよそ5千である。古くからニームとロデヴを結ぶ街道がここで川を渡る交通の要衝であった。街はヴィドゥルル川の東岸 (つまりガール県側) にあり、紀元1世紀のティベリウス帝治下に建設されたとされる長さ約190メートル、幅約7メートルの橋によって対岸と結ばれている。この橋は18世紀に大規模に修復された。現在残るアーチは7つであるが、もともとは17あったとも言われる。橋は中世には方形の時計塔 (現存) を介してソミエールの旧市街に直接つながっていた。

ソミエールの城は、旧市街の東側の丘の上に、街を見下ろすように建っている。アンデューズとソーヴの領主の系統に属するベルモン一族 (les Bermond d'Anduze-Sauve) によって10世紀から11世紀頃に建設されたのが最初とされるが、正確な時期についてはよく分らない (アンデューズ家についても、さまざまな分枝があり複雑で、不明な点も多い)。ソミエールの城塞建設の最も古い時期は9世紀頃とする見方もある。史料に最初に城の名が現れるのは11世紀半ば (1040年) のことである。アンデューズ一族でソミエール領主のピエール=ベルモン7世 (Pierre-Bermond VII) は、13世紀初めにはトゥールーズ伯家に臣従していた。ただしアルビジョワ十字軍の後半期1220年頃から王権の。支配が次第にソミエールに波及する。1226年には国王ルイ9世 (在位1226-1270年) がピエール=ベルモン7世からソミエールの街と城の半分を獲得し、1228年にはボーケールのセネシャル (国王代官) であるペラン・ラティニエ (Pèlerin Latinier) にソミエールの城の支配を委ねている。主塔であるベルモン塔 (tour Bermond) とは別にモンロール塔 (tour Montlaur) を新たに建設したのはルイ9世によるとされる。1248年、ルイ9世はベルモン家と協約を結び、ル・ケラルの城をベルモン家に譲る代わりに、ソミエールの街と城をすべて獲得するに至ったのであった。

百年戦争後半期、ソミエールはブルゴーニュに与していたため、1421年にセネシャルが街を攻囲したがうまくいかず、翌1422年に王太子シャルル (後のシャルル7世) 自らがソミエールを攻めている。16世紀に始まる宗教戦争以降も、この街と城はカトリックとプロテスタント (ユグノー) による激しい争奪の的であり続けた。1572年11月5日、プロテスタントがソミエールを奪取・占領した。500名もの部隊による奇襲であったとされる。それに対して1573年2月11日から、ラングドック総督でカトリック側のダンヴィル公アンリ・ドゥ・モンモランシ

一（Henri de Montmorency）が、兵力1万5千から2万もの大軍をもってソミエールを攻囲した。城に対しても大砲による激しい砲撃を加え、ルイ9世が建設させたモンロール塔はこの時に破壊されたとされる。しかしソミエール守備隊の抵抗は激しく、モンモランシー側も2千名の兵士を失うなど損害も大きかったが、結局翌年の4月になってプロテスタント側は降伏し、街を明け渡した。1575年夏にも再びソミエールの争奪戦が繰り広げられ、その際には城だけではなく街も大きな被害を受けて、市内にあったサン=ミシェル教会やサン=タマン教会が破壊された。

1598年に国王アンリ4世がナントの勅令を発すると、ソミエールではサン=ポンス教会がプロテスタントの寺院に転用された（現在の建物は1867年に再建）。しかしこの勅令によってもカトリックとプロテスタントの小競り合いは続き、プロテスタントのリーダーであったアンリ・ド・ロアン公（Henri II de Rohan）が1621年12月にソミエールを訪れた際には、ソミエールのプロテスタント住民が歓呼して彼を迎えている。プロテスタントの動きが高じて半ば反乱となった1622年と1625年には、ルイ13世（在位1610-1643年、宰相はリシュリュー）がプロテスタントの拠点となっていたソミエールを攻めた。その際には再建されていたモンロール塔が再び破壊されている（以後、完全に消滅）。この攻囲の後、ソミエールはカトリックの街となった。1685年のナントの勅令廃止の後にはソミエールの城は兵舎として使用され、礼拝堂も監獄となった。18世紀初頭にセヴェンヌを巻き込んで繰り広げられたカミザール戦争の際には、そのリーダーであったジャン・カヴァリエがソミエールに侵攻している（10月2日）。

フランス大革命の後にはソミエールの城は国有財産化され、切れ切れに分割されて売り払われた。また街の住民が住居などを建設するための石切場にもなってしまった。主塔は20世紀になってソミエールのコミューンが所有して今日に至っている。1936年、コミューンは旧兵舎を取り壊して中庭に大きな水道施設を作ったが、それも21世紀になって取り除かれた。

ソミエールの城は、旧市街を東側から見下ろす南北に長い丘の上にあつて、その南端には主塔（donjon）であるベルモン塔が建っている。高さ22メートルの方形の塔で、今は街のシンボルとなっている。建設は11世紀のことと言われる。塔の入口は北側に開けられている。かつての出入口は南側に小さなものがあつたが今は埋められている。塔の中に入ると1階部分は高さのある大きな部屋になっていて、南北の壁の上部に太い半円形のモールディングがコーニスのように水平に付けられ、その上に半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かる。そして東西の壁のそれぞれ高い位置には、内部に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。特に西側のそれは、半円形のアーチが内側に向けて次第に大きくなるようにして段々状に5つ並んでいる。これらの窓は外側は細長い銃眼のような開口部となっている。この主塔一階部分の部屋の様子は、聖堂建築物ではないが非常にロマネスク的である。

城塞礼拝堂（chapelle castrale）は、城を取り囲む西側の周壁に接する形で建てられている。その周壁に作られた城門のすぐ南に隣接し、主塔からは方形の建物を経た北側の位置にあたる。20世紀まではかなり荒れ果てて放置され、屋根や壁面の状態も悪かったが、2015年に大々的に修復されて、現在はきれいな姿となっている。最初に建設されたのは1248年のことで、ルイ9世の命による。すでに13世紀半ばのこととはいえ、建物にはロマネスク様式の名残が見



30.3.10 Chapelle castrale Saint-Sauveur de Sommières

られる。ももとは1階建てであったが、17世紀後半の1689年に2階部分が増築され、1階部分は内陣と身廊の間に仕切り壁を作って、2つに分けられて監獄の独房として使用された。2階部分の増築の際に、1階部分のヴォールトが低く作り替えられた。この古い1階部分には建物の北側の扉から入る。このロマネスク的な扉口は、形は半円頭形で二重の半円形モールディングに縁取られている。中に入るとそこはロマネスク様式である長方形の身廊部で、主塔の1階の部屋と同じく、太い半円形モールディングがコーニスのように水平に延び、その上にライズの小さなセグメンタル形のトンネル・ヴォールトが架かる。西壁にはやはりロマネスク様式の、内部に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開く。その西壁に沿って、2階部分に登るための階段が作られている。

身廊の東側には仕切り壁をへて東西幅の小さな内陣が続く。19世紀には貯水槽としても使用されていたという。南北両側に尖頭形アーチが架かるニッチがある。この内陣の西壁（つまり身廊部との間の仕切り壁の東側）の壁面上部には、17世紀終わりから監獄として使用されていた時の囚人たちの落書きが残されている（2013年に発見）。それを刻んだのは、戦争捕虜やプロテスタントの囚人たちであったという。最も古いものは1740年のものである。この礼拝堂1階の内陣の東側には太い尖頭形の横断アーチ（いわゆる凱旋アーチ）が架かり、その奥はこれもまた太い4つのリブが架けられたゴシック様式の後陣となる。リブの間には隅切りされた半円頭形のロマネスク様式の窓が3つ開けられている。この内陣=後陣部分は半地下のようになっていて、外から見ると、この3つの窓が並ぶのは地上に近い低い位置となっている。礼拝堂の南側からは、17世紀に増築され、2015年にきれいに修復された大きな2階部分に上がることができる。そこは現在はさまざまな展示などのスペースとして使用されている。

Bibliographie :

Aspord-Mercier, dir. (2013) p.95, pp.243-248; Mesqui (2000) pp.340-370, pp.525-526; Moreau (1992) pp.44-48; Moreau (1997) pp.232-234; Raynaud et Fiches (1999) pp.690-691; Werth (2013) pp.112-113; GV; RIP.

30.3.11 ヴィルヴィエイユ／サン=ボディル教会（Église Saint-Baudile, Villevieille）

ヴィルヴィエイユは、ソミエールのすぐ北（約 2 キロ）に位置するコミューンで、いわゆる旧市街は、南北が 280 メートルほどの長方形である。村役場から約 120 メートル南には、村の墓地に隣接する場所にガロ=ローマ時代のウィラの遺構が発掘・整備されている。旧市街の北端にはヴィルヴィエイユの城がある。もともとの建設は 11 世紀にさかのぼり、13 世紀半ばに国王ルイ 9 世のものとなった。14 世紀にイタリア人の豪商が手に入れ、その後はモントウルドン（Montredon、ソミエールの対岸）の領主であったパヴェ家（Les Pavée）が代々この城を所有した。

サン=ボディル教会（またはサント=クロワ教会）は、その旧市街の南東の角に建っている。13 世紀にはソミエールのサン=ボンズ小修道院の傘下の僧院があり、その聖堂は 1575 年にいったん破壊され、1681 年に修復・再建された。それが以前の建物をかなり残して行われたのか、あるいは全面的に建て替えられたのか、その修復の程度ははっきりとは分からない。いずれにせよ、以前のロマネスク聖堂の様子がかかなり残されて（あるいは再現されて）現在に至っているので、あらためて項目を立てて取り上げることにした。

現在は教区教会として使われている。身廊の東西軸は 45 度傾いている。3 ベイからなり、東端は平面で半円形後陣はないが、古い小石材による石組みが下半分に残されている。南側の外壁には強固な扶壁が 3 つ並び、扶壁の間には半円頭形で隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。北側には窓は見られないが、西端のベイに簡素な扉口が付けられている。またその西端の壁面の上に小さな鐘楼が立っている。聖堂の西側には、一般の住宅が直接に接する形で建てられている。内部は 1979 年に修復が行われ、シンプルであるがきれいな状態である。方形のピラストルによって区切られた各ベイには、南北ともに半円形の壁アーチが並ぶ。またそのピラストルの上には半円形の横断アーチが架けられ、天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトとなっている。

このヴィルヴィエイユには、1622 年と 1625 年にルイ 13 世が滞在し、プロテスタントが占拠するソミエール攻略の指揮を執っている。この旧市街からおよそ 3.5 キロ北に行くと、ポンドゥル城（Château de Pondre）がある。もとは 12 世紀初め頃に建てられたものであるが、17 世紀にルネサンス様式で建て替えられた。大革命で被害を受け、20 世紀初めにも火災に遭ったが、近年になって大々的に修復され、現在はシャトー・ホテルとなっている。「コ」の字形の居館の東側には広大な庭園が広がっている。



30.3.11 Villevieille

Bibliographie :

Fauchère (2000) pp.534-537; Germer-Durand (1868) pp.265-266; Hinnen (1998) pp.117-124; Moreau (1992) pp.42-44; Moreau (1997) pp.257-260; GV; RIP.

30.3.12a スヴィニャルグ／サン＝タンドレ教会 (Église Saint-André, Souvignargues) 遺構

ソミエールから県道 D22 北へ約 5 キロでスヴィニャルグの村役場 (mairie) に至る。この役場から県道をはさんですぐ西側が、中世には城と住居が円形の周壁で囲まれていた旧市域である。ロマネスクのサン＝タンドレ教会遺構は、村役場から反対側の東へ向けて、クルマが行き違えないほどの細いサン＝テティエンヌ道路 (chemine de Saint-Étienne) をおよそ 450 メートルである。

1115 年からプサルモディ修道院 [30.3.7b] がここにあったブリウレを所有していたが、教皇ウルバヌス 2 世 (在位 1088-1099 年) の教書にその名が現れることから、建設されたのは 11 世紀後半のことであろう (Germer-Durand は 1031 年が史料の初出とする)。宗教戦争の時に放棄され、修道士たちのためのミサなどは旧市域に建てられた新しいサン＝タンドレ教会の方で行われたという。古いサン＝タンドレの方は 18 世紀にはヴォールトが崩落し、その後廃墟化が進んだ。1990 年代になって地元愛好家たちの主導によって、部分的な修復工事が行われた (それを記念するモニュメントが聖堂の南側に作られている)。身廊の南側の地面には、古い石棺の蓋が並べられている。それらの正確な年代は不明である。

3 ベイからなるシンプルな単身廊形式で、東端は半円形後陣である。反対側の西ファサードには中央に大きな半円頭形の扉口があり、アーキヴォルトの半円アーチがきれいに残されているが、扉口自体は石で埋められている。身廊外壁には、南北ともにとりわけ下半分に整形された大石材などがきれいに積まれている様子が見て取れる。身廊の東西両端と中央部にしっかりした扶壁が付けられている (南側の中央の扶壁は土台部分のみが残る)。ただし外部の扶壁は、身廊内部の 3 つのベイを区切るピラストルの位置には対応していない。北側の壁には開口部はないが、足場を組むための小穴が多数開けられている。身廊南側には、東寄りの所に方形の出入口があり、さらにその上には、かつて隣接して建てられていた建物の三角形の痕跡が残されている。また南壁の西寄りの上部には、半円頭形ロマネスク様式の大きな窓が開けられている。恐らくかつては内部と外部の両方に隅切りされていたと思われるが、隅切り部分は破壊されてしまっている。ただし、その窓の頭のアーチ部分には、クラヴォーのすぐ下側にトラスの一部が残されている。

半円形の後陣には 4 つの壁付きの小円柱が並んでいる。それらの小円柱はどれも下に向けて少し広がった後陣の基壇の上に立ち上がるが、後陣は全体的に上部が失われており、小円柱もすべて途中までしかない。後陣には中ほどに縦に長い半円頭形の窓が開けられているが、その位置は窓の両側に付けられている小円柱の間のちょうど中央とはなっていない。小円柱の方が、少し北にずれているのである。この後陣の上半分の壁面を組む石材には、その石を切り出して整形する際に付けられた斜めの線刻が並んでいる。比較的新しいこれらの石材は、1990 年代の修復工事の際に積まれたものであろう。

身廊内部の 3 つのベイは背の高い壁付きの半円柱によって区切られ、各ベイの壁面にはこれもまた高さのある壁アーチが並ぶ。ただしもともとはヴォールトの起拱点に水平に連なるコーニスが付けられていたようである。第 1 ベイにはゴシック期になって作られたトリビューン (2 階席) の一部が残る。一種のナルテクスとも言えるその 1 階部分の天井は交差リブ・ヴォール



30.3.12a Saint-André de Souvignargues

トである。

身廊および後陣部分はヴォールトはすべて失われている。しかし放棄された遺構であるにもかかわらず、内部には豊かな彫刻装飾が残されている。後陣の半ドームの起拱点にはコーニスが巡るが、そのうち北側の5つの横長の組石には、下面に三条線からなる組紐が、上面には二条線の組紐が連なる。中央部および南側の組石の下面には、湾曲しながら横に延びる二条線の茎の上下に葉の長いパルメットが連なる。上面にはひねり紐文様が連続している。このコーニスの左右には、それを延長するような形で、後陣とそれに隣接する第3ベイの間に付けられた方形のピラストルのインポストがつながる。そのインポストの彫刻は、北側はパルメット、南側は三条線の組紐の連なりとなっている。後陣中央には細長い半円頭形の窓が開いており、その円頭部を縁取る半円アーチのクラヴォーの下側に、円筒形モールディング（3つの組石からなる）が残されている。

身廊側壁の壁付きの半円柱には、一番上に柱頭彫刻が付けられている。注目すべきは身廊北壁のもので、そのうち東側の円柱の柱頭は、下から順に、ひねり紐のアストラガル、葉先の鋭いシンメトリックなアカンサス、図形的なヴォリュート、連続するパルメットの冠板である。西側の柱頭は、下から順に、ひねり紐のアストラガル、連続するパルメット、図形的なヴォリュートと続くが、そのヴォリュートの間（つまりコルベイユの中央）には、アゴの長い不思議な人物の顔が彫刻されている（上の写真右側）。その両目は小穴となっている。冠板はやはり連続するパルメットである。これらの柱頭彫刻のパルメットが連なる冠板は、そのまま円柱と円柱の間の水平のコーニスにつながり、かつてはヴォールトの起拱点の役割を果たしていた（ただし部分的に失われている）。

スヴィニャルグのサン＝タンドレ教会の装飾は、ここを所有していたプサルモディ修道院〔30.3.7b〕の様式を共有しているとされる。しかしそのパルメットの連続フリーズや葉飾り文様などは、サン＝ジル修道院傘下にあったサント＝セシル・DESTAJERL小修道院教会の扉口装飾（〔30.3.6c〕今はパリのルーヴルにある）のものによく似ている。プサルモディとサン＝ジルは地理的にも近接し、しばしばライバル関係にあったとされる。しかし空間的な近さが芸術様式における親近性を生み出していたことが見て取れる良い例であるとも言えよう。

Bibliographie :

Bessac et Pécourt (1995) pp. 91-122; Buholzer (1962) pp.131-132; Clément (1993) pp.68-69; Germer-Durand (1868) pp.240-241.

30.3.12b スヴィニャルグ/サン=テティエンヌ=デスカット教会

(Église Saint-Étienne-d'Escattes, Souvignargues)

スヴィニャルグのコミューンのエスカット地区にある。村役場からサン=タン Dre 教会遺構を經由して細い道を西へ行くと約 2 キロ、県道 D22 と D107 を通って西へ向かうなら約 3 キロである。エスカットはフランス革命の後、スヴィニャルグのコミューンに併合された。

サン=テティエンヌ=デスカット教会は、この地区のほぼ中央にある広場の、わずかに斜面となった場所に建っている。建設は 12 世紀とされる。同じスヴィニャルグにあるサン=タン Dre 教会 [30.3.11a] と同様にブサルモディ修道院が所有する聖堂であった。16 世紀の宗教戦争の際には被害を受けて半ば廃墟化した。1660 年に修復工事が行われたが、1703 年に今度はカミザール戦争によって焼かれた。その後ほどなくして再び修復工事が行われて現在に至る。最近になって身廊南側に建てられていた聖具室が取り除かれているが、その際には聖具室と内陣の間の行き来のために開けられていた後陣南側の出入口が埋められた。

2 ベイからなる単身廊形式で、東側には半円形の後陣が付くというシンプルな聖堂である。量塊感のある西ファサードは飾り気がないもので、3 段の石段を登ったところにセグメンタルアーチ形のシンプルな扉口が付く。ファサード上部には大きな丸窓が開けられ、三角形の切妻の頂部には 18 世紀になって古典様式の鐘楼が置かれた。西ファサード南側の上部には、方形の小塔のような構造物があり、その中には鐘楼に登るための螺旋階段が作られている。これも 18 世紀のものである。身廊外壁には、南北ともに、あまり整形されていない小・中石材が積みまれ、東西両端と中央に扶壁が付けられている。北側の外壁に付けられた扶壁の方が南側のそれよりも出張りが大きい（とりわけ西側の 2 つの扶壁）。

半円形の後陣は、地面から約 2 メートルのところまでが基壇で、その上に水平に半円筒形のモールディングが巡る。その上には東端上部に開けられた半円頭形のロマネスク様式の窓（外側を半円アーチに縁取られている）の高さまで整形された中石材が積み重ねられている。その上は不整形の礫の乱積みとなっているが、その乱積み部分には、文字が刻まれた横長の石が水平に並べられ、さらにその上にも細かい文字が刻まれた方形の石板が組み込まれている。水平に並べられた横長の石に刻まれた文字は、『エレミア書』第 3 章 1 節の文言「私に戻ろうというのかと主は言われる」である。その上の方形のパネ



30.3.12b Saint-Étienne-d'Escattes

ルには、上下2段に3行ずつ『詩篇』にまつわる言葉が刻まれている。これらの碑銘の年代について正確に同定することは難しいが、刻まれている文字の形などからさほど古いものではなくさそうである。しかも17世紀あるいは18世紀の修復工事の際に、別の場所から移されてこの場所に組み込まれたものと思われる。

聖堂内部は、側壁に付けられた方形のピラストルとその上に架かる横断アーチによって2つのベイに分けられている。後陣は半円形で、中央（東端）にロマネスク様式の半円頭形の細長い窓が開けられているが、現在は20世紀に入って作られた石造りの白いカヴァー（鍵付きの小さな蓋が窓を覆い、その左右に付けられた小円柱の上には半円頭形のアーチが架かる）が据え付けられており、窓自体は通常は採光の役割を果たしてはいない。堂内は全体的に白い漆喰で上塗りされており、古い歴史は感じられない。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.69-70; Germer-Durand (1868) pp.204-205.

30.3.13 サリネル／サン=ジュリアン=ドゥ=モントルドン礼拝堂

(Chapelle Saint-Julien-de-Montredon, Salinelles)

サリネルのコミューンは、ソミエールから県道 D35 で北へ約4キロであるが、サン=ジュリアン=ドゥ=モントルドン礼拝堂は、サリネルの中心（村役場）の南およそ1.2キロの畑地のただ中に建っている。県道 D35 と D178 が分かれる大きなロータリーから、細い「サン=ジュリアンの道」（Chemin de Saint-Julien）に入って西におよそ650メートルである。その場所はブドウ畑などに囲まれて他に住宅などの建物などは何もない。糸杉や松の木が聖堂に寄り添うようにして立ち、その光景は誠に南フランス的で美しいものである。

サン=ジュリアン礼拝堂はコミューンの墓地の中に建っている。もともとこの場所には古代のウィラや墓地があった。今はサリネルのコミューン域内であるが、中世の間はヴィドゥルル川をはさんでソミエールの対岸の小山であるモントルドンに属した。モントルドンには13世紀頃には封建時代の城塞などが築かれていた。その城塞はルイ9世がエグ=モルトを建設する際に、その母ブランシュ・ドゥ・カスティーユによって破壊されたと言われる。

サン=ジュリアンのブリウレとその礼拝堂は、813年以来ブサルモディ修道院に属していた。現在目にする建物は、大小2つの身廊と後陣が南北に並ぶ、いわば二重聖堂の形をしている。そのうち、北側の大きな方の聖堂（以下、北側聖堂）が建設されたのは11世紀末頃のこととされる。南側の小さい方の聖堂（以下、南側聖堂）は、それより後の12世紀後半に建てられた。北側聖堂はブリウレの修道士たちのためのもので、南側聖堂はモントルドンの領主とその家族が、自分たち専用の礼拝堂として増築させたものではないかとされている。いずれにしても、中世の間サン=ジュリアンは、この地域では重要なブリウレの1つとなっていたのであるが、16世紀の宗教戦争の間に破壊されてしまった。17世紀後半になって修復・再建されるも、カミザール戦争の際に再び荒らされている（1703年）。その後1970年代以降、地元の愛好会の主導で大々的に修復工事（とりわけ聖堂内部の修復）が行われて今日に至っている。

この二重聖堂への入口としては、それぞれの聖堂の西側にシンプルな半円頭形の扉口（半円アーチの下に無装飾のタンパン、そして方形の扉）が1つずつ開けられているが、北側聖堂の南西端にもやはり、小さなポーチの中に同じ形の扉口が付けられている。北側聖堂の西ファサードは、中石材が比較的ラフに積まれている。切妻となった最上部は、そこより下の壁面よりも南北幅が狭くなっており、中央部には隅切りされた半円頭形の窓が開けられている（正確には半円頭形なのは外側のアーチ部分で、窓自体の頭部はセグメンタルアーチ）。この窓の左右両側の壁面には張り出しの小さな方形のピラストルが付けられている（向かって右側のものは少し短い）。南側聖堂は、北側聖堂より東西が短いので、西ファサードも少し東側に引っ込んでいる。壁面の石積みは中石材が主体で、北側のファサードよりもきっちりと積まれているという印象である。

北側聖堂の身廊部分の外壁面には、南北ともに、上部（屋根のすぐ下）に、小アーチが並ぶロンバルディア帯が連なる。ただしこれは北壁の東端のベイでは失われている。その代わりにそこには隅切りされたロマネスク様式の窓が1つ開けられている。ロンバルディア帯は、北側聖堂の後陣にも付けられている。この半円形後陣（その中央には外側に向けて大きく隅切りされた半円頭形の縦長の窓が開けられている）のロンバルディア帯は、出張りの小さな方形のピラストルの間に小アーチが3つ一組となって連続するアーケードとなっており、さらにそのアーケードの上の屋根との境目には、歯車状の装飾帯が巡らされている。ロンバルディア帯については、この近くだけでも例えば、ヴェネジヤンのサン=ピエール礼拝堂 [30.1.12b] やトレスクのサン=マルタン=ドゥ=ジュサン礼拝堂 [30.1.18b]、ユゼスのサン=ジュニエス教会遺構 [30.2.1e] などにも見られる。また身廊部北東端に付けられた小ぶりの鐘塔との組み合わせなどの様子は、少し離れるが、現エロー県にあるセスラスのサン=ジェルマン礼拝堂 (Chapelle Saint-Germain de Cesseras) などを思い浮かべることができる。さらに歯車状の装飾帯については、やはりこの近くではサブランにあるコンプのサン=ジュリアン=ドゥ=ピストラン礼拝堂 [30.1.16b] などを挙げることができよう。

12世紀後半に建設された小さな南側聖堂の方は、その南側外壁に4つの強固な扶壁が付けられており、それらの扶壁によって区切られた3つのベイには、それぞれ隅切りされた半円頭形の窓が1つずつ開けられている。それら3つの窓のアーチのすぐ上には水平のモールディングが付けられている。この南側聖堂の側壁には、後陣部も含めてロンバルディア帯などは見られない。この南側聖堂の後陣は五角形である。ただし、上部の屋根に近い部分は大石材による半円形の石積みになっているのが興味深い。この後陣の東端の面には半円頭形で縦に細長い開口部がある。隅切りはされていない。

サン=ジュリアンの内部は、2つの聖堂（身廊）が平行している。北側聖堂の側壁は南北ともに



30.3.13 Saint-Julien-de-Montredon

方形のピラストルが付けられ、それによって3つのベイに分けられている。それぞれのベイには半円頭形の壁アーチが並ぶ。南側の壁の中央のベイの下には、方形の小さなニッチに挟まれる形で、半円アーチの架かる扉が開けられている。南側聖堂が建設される前は、今は失われたプリウレの建物との行き来のためのものであった（現在この扉は閉じられている）。この同じベイの上部には隅切りされた半円頭形のロマネスク様式の窓が開けられているが、これも南側聖堂が建てられたために、現在は窓の役割を果たしてはいない。北側聖堂の北壁には、第2ベイにやはりロマネスク様式の窓が開けられている。身廊部と後陣の間には、東西幅の小さな内陣のベイがある。その南北の壁にはそれぞれ方形の扉があり、北側の扉は文字通り非常に小さな小後陣に通じている。南側の扉の奥も狭いスペースとなっており、そこはかつてはやはり小後陣であったのかも知れない。したがってこの内陣のベイは、言わば小さなトランセプトのような形をしていることになる。なお北側の小後陣の上は方形の鐘塔となっているが、上に登るための階段などは作られていない。実際、鐘は塔の内部ではなく外に吊されている。北側聖堂の内陣の東側は半円形の後陣で、中央にロマネスク様式の窓が開けられている。上部を巡るコーニスの上には半ドームが架けられている。北側聖堂の身廊部は、ピラストルの上に半円形の横断アーチが架けられている。その天井は建設当時は半円筒形のトンネル・ヴォールトであったが、1674年の修復工事の際に4分交差リブ・ヴォールトに架け替えられた。

この北側聖堂のピラストルにはさまざまな柱頭彫刻が見られる。植物文様の他、向かい合わせに彫られた鳥やニトリ、四足獣、野ウサギなどである。それらの様子は、図像的にはクリュアス（Cruas、アルデッシュ県）のサント=マリー修道院教会の地下クリプトのもの（11-12世紀頃）を連想させる。

南側聖堂は、北側聖堂の第3ベイに開けられた半円頭形の大きなアーチの下を通って行き来するようになっている（このアーチが架かる東側の柱のニッチからは碑文が刻まれた古代の石板が見つかっている）。南側聖堂は、外壁（南側）に付けられた扶壁から、プランは2ベイからなると考えられるが、内部にピラストルはないので、東西に長いホールのようなものである。その天井には狭い間隔で11の半円形横断アーチが並んでおり、これは非常に珍しい仕様である。1970年代の修復工事の際にきれいに再建されたものであるが、もともとはニームにある古代遺跡「ディアヌの神殿」（[30.3.1a] Temple de Diane, Nîmes）の中央の大きな部屋（cella）の天井をモデルにして作られたものではないかとも言われる。後陣は外側は五角形であるが、内部は半円形である。身廊から見て少し南側に寄った場所に位置している。中央には隅切りされたロマネスク様式の細長い窓が開けられている。水平のコーニスの上に半ドームが載る。南側聖堂の南の側壁には、隅切りされた半円頭形の窓が3ヶ所開けられており、採光の役割を果たしている。

なお M. Moreau によれば、モントルドン上の丘の上の城塞の遺跡の中に、古いモントルドン教会の遺構が残されているという。これについてはその歴史も含めて詳しいことはあまりよく分からない。正確な場所は不明で、筆者もそこを訪れることはできなかった。側壁の一部が残り、そこには壁アーチなどが見て取れるという。

Bibliographie :

Barruol (1986) pp.361-368; Buholzer (1962) p.124; CAG, 30/3, pp.663-667; Clément (1993) pp.70-71; Goiffon (1881) p.354; Moreau (1992) pp.40-42; Morel (2008) p.62; Nougaret et Saint-Jean (1975) p.48; Peyron (1975) pp.1-13; Rivière et Sauveplane (2014) pp.8-84.

30.3.14 アスペール／旧サン=ピエール教会 (Ancienne Église Saint-Pierre, Aspères) 遺構

アスペールはガール県南西部にあって、エロー県との県境に位置する。サリネルのコミューンから県道 D254 で西へおよそ 2.5 キロでアスペールの村役場である。19 世紀の新しいサン=ピエール教会がその隣に建っている。そこからさらに細いプサルモディ道路 (Chemin de Psalmodi) を北西に 450 メートルほどゆるやかに登ったところに、石垣に囲まれた今は打ち捨てられて使われていない墓地があり、その中に古い歴史を持つ旧サン=ピエール教会の遺構がひっそりと残されている。

アスペールの名前は、815 年のプサルモディ修道院 [30.3.7b] のカルチュレール (証書集) の中に現れる。このプリウレは 16 世紀まではプサルモディの傘下にあり続けた。1537 年にプサルモディ本院が世俗化された後は、アスペールのプリウレから修道士の姿はなくなったが、住民のために祭式などは行われ続けた。もともとはニーム司教区に属したが、1694 年からはアレソ司教区に編入された。宗教戦争の時に被害を受け、さらに 1703 年にはカミザール戦争によって焼かれている。ほどなくして修復された聖堂で祭式なども継続されるが、フランス革命が起こるとアスペールの司祭は聖職者民事基本法による宣誓を拒否して追放され、聖堂も国有財産として売却された。1801 年のコンコルダ (政教条約) の後のアスペールは、最初はサン=クレマンの教区に、その後はサリネルの教区に組み込まれた。1850 年には、まだこの古いサン=ピエールでミサなどが行われていたようである。しかし 1854 年にアスペールの村の中に新しいサン=ピエール教会が建てられると、この古い聖堂は全く使われなくなり、急速に廃墟化が進んだ。

旧サン=ピエール教会の遺構は墓地の敷地の西端にある。いわゆるラテン十字形で、2 ベイからなる単身廊にトランセプトが続き、さらにその東側に主後陣と左右の小後陣が並ぶ。これはプサルモディ本院のカロリング期にさかのぼる古い聖堂 [30.3.7b] の平面プランと同じである。ただし現在残るのは、身廊部の南北の壁の一部、トランセプトの西側の壁と北側の翼廊の壁の一部、そして南側の小後陣の土台の石組みの一部のみである。ヴォールトは壁面の上半分とともに全て失われている。天井には、もともとは横断アーチと半円筒ヴォールトが架けられている。身廊部分およびトランセプトは比較的良く整形された石灰岩の小・中石材が積まれている。その壁面には、方形のピラストルが部分的に残されている。また南側の壁面には半円形の壁アーチが一部分ではあるが崩れることなく立っている。身廊の東端には方形の出入口らしきものの痕跡が見られる。しかしその部分は石積みで埋められており洗礼盤のような方形の石槽がはめ込まれている。その出入口のある第 1 ベイの南側には、やはりかつて出入口として使われていたのではないかと思われる開口部の名残があるが、これも石積みで埋められている。



30.3.14 Saint-Pierre d'Aspères

トランセプトの東側に付けられていた半円形の主後陣は完全に失われており、その痕跡すら認められない。その南北に並んでいた小後陣もそれぞれ半円形であったが、北側のそれはトランセプト北壁から続くごく一部分の石積みが残っている。南側の小後陣は、カーブを描くその土台の石組みの一部だけが認められる。聖堂の遺構には、内部にも外部にも装飾の類いは全く見られない。かつては柱頭彫刻などもあったのかも知れないが、それもまた全て失われており、当時の様子をうかがい知ることができない。

旧サン=ピエール教会の遺構の東側に広がる墓地は、今はすっかり打ち捨てられていてもはや訪れる人は誰もいないが、そこに残された墓碑銘などを見ると 20 世紀初め頃までは使われていたようである。サン=ピエールはブサルモディのプリウレがなくなった後も、長く村の墓地聖堂としての役割を果たしていたのであろう。

Bibliographie :

Clément (1993) p.72; Goiffon (1881) pp.25-26; RIP.

30.3.15 ガイアン／サン=プリヴァ教会 (Église Saint-Privat, Gailhan)

ソミエールから県道 D35 で北へおよそ 9 キロである。ニーム司教区内であるが、ここはすでにセヴェンヌ地方への入口にあたる。古くは紀元前 5 世紀頃に、ケルト人のオッピドゥム (oppidum du Plan de la Tour) があつた場所である。古代ガロ=ローマ時代にも定住が見られた。

サン=プリヴァ教会はガイアンの古い旧集落の南側に位置し、県道 D308 から 50 メートルほど東に入ったところの小さな広場に面して建っている。2004 年に行われた発掘調査から、この場所には 5 世紀頃の古い聖堂があつたことが知られている。現在のサン=プリヴァ教会は、11 世紀にまでさかのぼるもので、高さのある鐘楼壁となった西ファサードが特徴的である。そのファサードの南北は厚さのある扶壁である。中央下は、半円アーチが架かる 19 世紀のネオ・ロマnescク様式の扉口である。そこからかなり上の位置に十字形の開口部が開けられ、一番上は

鐘を吊すためのベイが1つ開く鐘楼である。そのベイの土台部分には歯車装飾が付けられている。鐘楼の三角形の頂部の上には石の小さなギリシア十字が据えられている。

身廊はかつては今よりも高さがあり、東に付けられた半円形の後陣も含めてその上部にはロンバルディア帯が付けられていたとされるが、現在の身廊は15世紀後半または宗教戦争直後の16世紀に高さが低くされ、そこにあったロンバルディア帯も失われた。身廊の南側外壁には屋根まで達する横幅のある出張りがあり、その下にかつて



30.3.15 Saint-Privat de Gailhan

の扉口が残されている。ただし19世紀になって石で埋められている。この扉口の上に架けられた半円アーチのクラヴォー（組石）は頂部付近で色の異なる石が交互に組まれたものとなっている。この出張りの向かってすぐ左側にも、細くて出張りの少ない小さな扶壁が屋根の高さまで付けられている。この南壁には隅切りされたロマネスク様式の半円頭形の窓が2つ開けられているが、向かって左すなわち西側の窓の方が高い位置にある。また南壁の東側には、近代になって増築された聖具室がある。身廊の北側は住居の敷地（私有地）が接していて、残念ながら見ることができない。

かつて聖堂東端部にあった半円形の後陣は、17世紀になって身廊を東側に延長してより大きな内陣を建設した際に取り壊され、方形の後陣が作られた。その東壁は平面形で切妻のすぐ下には半円頭形で縦長の窓が2つ並べて開けられている。

サン=ブリヴァ教会の内部は、3ベイからなる身廊と、その東に17世紀の大きな方形の内陣が続く。身廊のベイは一番西の第1ベイが、他の2つのベイより少し東西幅が狭い。この西端のベイにはトリビューン（2階席）が作られている。各ベイを区切るのは、側壁に付けられた方形のピラストルと、その上に架けられた横断アーチで、この横断アーチおよび各ベイの天井の交差リブは、複数の円筒形のモールディングが束ねられたものとなっている。この交差リブ・ヴォールトは、先にも触れたように15世紀あるいは16世紀のものである。身廊の開口部は、南側の第1ベイと第3ベイおよび北側の第3ベイに開けられている隅切りされたロマネスク様式の窓である。平面形となった17世紀の後陣の東壁にも隅切りされた窓が2つ開けられて採光の役割を果たしている。聖堂内部には、特に注目すべき彫刻装飾などは見られない。なお、身廊の第2ベイと第3ベイの間を区切る側壁のピラストルの位置が、少しずれていて正確に対応していないが、その理由はよく分かっていない。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.408-410; Goiffon (1881) pp.128-129; Pellé (2004) p.87; Poisson (2006) pp.70-72.

30.3.16 ヴィック=ル=フェスク／サン=ジャン教会（Église Saint-Jean, Vic-le-Fesq）

ヴィック=ル=フェスクは、ソミエールから県道 D6110 を北へ 11 キロ向かい、さらに D999 を西へ 2 キロである。最も古い旧集落地区は D999 から 300 メートルほど南に入ったところで、サン=ジャン教会は、中世の間は城壁で要塞化されていたこの小さな円形の旧集落の、ほぼ中心に位置している。史料における初出は、1106 年の教皇パスカリス 2 世（在位 1099-1118 年）の教書においてである。

西ファサードの様子は、ガイアンのサン=プリヴァ教会 [30.3.14] のものによく似ている。2010 年代に入って大々的な修復工事が行われ、外壁の石積みなどもすべて漆喰で上塗りされたために、今は全体として歴史的な古さはあまり感じられない。西ファサードは左右両端が一番上まで立ち上がる強固な扶壁となっている。中央の下には半円頭形のシンプルな扉口が開き、その上に半円頭形で隅切りされたロマネスク様式の窓が 1 つ開けられ（半円アーチの枠の中に開く）、一番上には古典様式の小さな鐘楼が据えられている。身廊はガイアンのサン=プリヴァ教会のように切り詰められることはなく、もともとの高さを維持している。その身廊の外壁には出張りの少ない扶壁が屋根まで付けられており、身廊のペイを 2 つに区切っている。身廊東端は、これもまた高さのある半円形の後陣であるが、やはり上塗りされているため古さはまったく感じられない。その中央には、まるで銃眼のような縦に細長い窓が開けられている。身廊の南側には半円頭形の出入口が 1 つだけ開けられている。一方、身廊の北側には各ペイに 1 つずつロマネスク様式の窓が開けられており、後陣とその西隣のペイの間に小ぶりの鐘塔が立っている。

内部は第 1 ペイがその隣のペイや内陣のペイよりも少し狭くなっており、古いトリビューンが作られている。ペイを区切る壁付きの半円柱のインポストは五角形に面切りされている。

Bibliographie :

Clément (1993) p.46; Germer-Durand (1868) p.262; Goiffon (1881) pp.404-405; RIP.



30.3.16

Saint-Jean de Vic-le-Fesq

30.3.17 コンバス／サン=プリス教会（Église Saint-Brice, Combas）

コンバス（あるいはコンバ）のコミューンは、ソミエールから県道 D6110 を 7 キロほど北へ向かい、D764 に入ってさらに 2 キロである。サン=プリス教会は、コンバスの旧集落地区のほぼ中央に位置し、中世から残る古くて狭い街路に囲まれて建っている。この場所はサン=プリス小修道院（プリウレ）とともに、教皇ウルバヌス 2 世の 1099 年の教書において、プサルモディ修道院 [30.3.7b] が所有するものとしてその名が現れる。ただし 12 世紀後半にはプサルモディはこの所領を売却して手放している。プリウレはユゼス司教区に所属して存続し、14 世紀頃には要塞化されている。16 世紀の宗教戦争の時にはコンバスの村はいったんはプロテスタン

トの住民が優勢となるが、カトリック側に奪い返されている。その際、村にあった城は破壊された。さらに 18 世紀初めにはカミザール戦争に巻き込まれ、1703 年には村とサン=ブリス教会が略奪された（6 月 5 日）。カミザールたちは聖堂の壁に穴を開け、そこから乱入して聖堂内の宝物などを奪い、火を放ったという。

コンバスのサン=ブリス教会の現在の建物は 12 世紀までさかのぼる。西ファサードはガイアン [30.3.14] やヴィック=ル=フェスク [30.3.15] とよく似ている。左右両側に扶壁が付き、扉口は 19 世紀の新しいものである。その上には半円頭形の窓が開けられ（隅切りはない）、最上部は中央から少しだけ北側に寄った位置に、方形の鐘楼が載せられている。窓から上は要塞化された際にかさ上げされた（あるいは改築された）部分であると思われる。それは身廊の南北の側壁の石積みを見ると明らかである。身廊南壁には、第 1 ベイの要塞化された最上部に石落としのような構造物が付けられている。また同じベイの中ほどの高さの所には、隅切りされた半円頭形で縦長のロマネスク様式の窓が開けられている。その左右には小円柱が立ち、アーチ部分には多角形のモールディングが付けられている。それらの小円柱は基壇と円形のトルスの上に立ち柱頭彫刻も付けられているが、破損していて元の形は判然としない。この窓のすぐ左隣の壁面には、1733 年の年号が刻まれた大きな日時計が彫刻されている。

身廊外壁には出張りの小さな扶壁が付けられ、それによって身廊部が 2 つのベイに区切られていることが分かる。東側のベイには、南北ともに大きな側室（礼拝室）が付けられているが、これは 19 世紀半ばのもので、もとは墓地だった場所に作られたものである。その 2 つの側室が言わばトランセプトを形作っており、結果的に聖堂の平面プランはラテン十字形となっている。身廊の東側には、14 世紀に高さが増えられた半円形の後陣が付けられている。その中ほどの高さまでが幅が少し広い基壇部分で、整形された中石材がきっちりと積まれている。しかし中ほどから上の部分は、大きさがさまざま異なる小石材が、比較的ラフに積まれている。その中央部には大きな半円頭形の窓が開けられている。さらにその上には聖堂が要塞化されていた名残であるコーベルの一部が残されているのが見える。後陣を巡るように作られていたマシクーリ、あるいは周歩路を支えるものであったと思われる。また後陣の南側（向かって左側）には、階段を登って後陣の内部に入るための、近代になって作られた方形の出入口がある。

聖堂内部は 2 ベイの身廊からなる。そのうち東側のベイは南北に大きな礼拝室が付くので、トランセプトの交差部となっている。その交差部と、非常に高さのある凱旋アーチ（中央に丸窓がある）の東側に続く後陣の間には東西幅の狭いベイがあり、これを内陣と見ることできる。第 1 ベイには南北の側壁に高さのある半円形の壁アーチが付けられ、南側の壁アーチの中には半円頭形のロマネスク様式の窓が開けられている。身廊西端には 2 階席が設けられている。またこの西端の壁の上部には半円頭形の大きな



30.3.17 Saint-Brice de Combas

窓が開けられ、ステンドグラスがはめられている。2 つのベイの間には方形のピラストルが立ち上がり、その上はベイを区切る半円形の横断アーチである。天井は水平のコーニスの上に架けられた半円筒形のトンネル・ヴォールトとなっている。第2ベイは大きな半円アーチを介して南北の礼拝室と接続する。後陣は半円形で、その中央には半円頭形の大きな窓が開く。後陣を水平に巡るコーニスの上には半ドームが載せられている。聖堂内には彫刻装飾の類いは見られない。

Bibliographie :

Clément (1993) p.72; Germer-Durand (1868) p.62; Goiffon (1881) pp.99-100.

略記号と参考文献

各聖堂のビブリオグラフィーでは、和書、翻訳書、欧文文献（ファーストネームは略）、GV と RIP、Web-site の順に記した。

CAF : *Congrès Archéologique de France*. Paris, Société Française d'Archéologie.

CAG : *Carte Archéologique de la Gaul*. Paris, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres.

GV : Guide de Visite.

RIP : Renseignements ou Informations sur Place.

Aspord-Mercier, Sophie, dir. (2013) : *Sommières, histoire urbaine et monumentale d'une place forte en Languedoc oriental*, Paris, Errance.

Bardy, Benjamin, et al. (1966) : *Dictionnaire des Églises de France, Ilc, Cévennes Languedoc Roussillon*, Paris, Robert Laffont.

Barruol, Guy (1986) : « Le vicus Varatunnum à Saint-Julien-de-Salinelles (Gard) », in *Revue archéologique de Narbonnaise*, tome 19, pp.361-368.

Bessac, Jean-Claude et Pécourt, Jacques (1995) : « Remarques sur les techniques de construction de second art roman, à propos de Saint-André-de-Souviagnargues (Gard) », in *Archéologie du Midi médiéval*. Tome 13, pp. 91-122.

Bonnery, André (2010) : « Architecture préromane en Languedoc : Aniane et Psalmodi », in *Bulletin Monumental*, tome 168, no.1, pp.104-105.

Borg, Alan (1971) : « Psalmodi », in *Gesta*, vol X/2, International center of medieval art, The University of Chicago Press, pp.63-70.

Buholzer, Jean-François (1962) : « Notes sur quelques églises romanes du Gard », in *Annales du Midi*, tome 74, no.58, pp.121-137.

Clément, Pierre Albert (1989) : *Les chemins à travers les âges, en Cévennes et Bas*

- Languedoc*, Presses du Languedoc.
- (1993) : *Églises Romanes oubliées du Bas Languedoc*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.
- Devic, Claude et Vaissète, Joseph (1872) : *Histoire générale de Languedoc*, tome 4, partie 2, listes des dignitaires ecclésiastiques, Toulouse, Éditions Privat.
- Dodds, Jerrilyn, et al. (1982) : « Saint-Laurent-d'Aigouze (Gard) . ancienne abbaye de Psalmody », in *Archéologie Médiévale*, tome 12, pp.335-336.
- (1989) : « L'ancienne abbaye de Psalmodi (Saint-Laurent-d'Aigouze, Gard) , premier bilan des fouilles (1970-1988) », in *Archéologie Médiévale*, tome 19, pp.7-55.
- Fauchère, Nicolas (2000) : « Château de Villevieille », in *CAF* (1999/Gard) pp.534-537.
- Germer-Durand, Eugène (1868) : *Dictionnaire topographique du département du Gard*, Paris.
- Goiffon, Etienne (1881) : *Dictionnaire topographique, statistique et historique du diocèse de Nîmes*, Nîmes.
- Hinnen, Pierre (1998) : *À propos de Villevieille*, Villevieille, A.S.S.V. Éditions.
- Mesqui, Jean (2000a) : « Le château de Sommières », in *CAF* (1999/Gard) pp.340-370.
- (2000b) : « Sommières: Pont romaine », in *CAF* (1999/Gard) pp.525-526.
- Moreau, Marthe (1992) : *Le Vidourle : ses villes, ses moulins et ses ponts*, Les Presses du Languedoc, Montpellier.
- (1997) : *Les châteaux du Gard du moyen âge à la Révolution*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.
- Morel, Jacques (2008) : *Guide des Abbayes et Prieurés en région Rhône-Alpes*, Lyon, Éditions Autre Vue.
- Nougaret, Jean et Saint-Jean, Robert (1975) : *Languedoc roman*, Saint-Léger-Vauban, Zodiaque.
- Ott, Mathieu (2002) : « Gallargues-le-Montueux : Église Saint-Martin », *Bilan scientifique régional Languedoc-Roussillon*, Montpellier, Service Régional de l'Archéologie (SRA) p.68.
- Pellé, Richard (2004) : « Gailhan : Église St-Privat », in *Bilan scientifique régional Languedoc-Roussillon*, Montpellier, Service Régional de l'Archéologie, p.87.
- Pérouse de Montclos, Jean-Marie, dir. (1996) : *Languedoc-Roussillon, Le guide du patrimoine*, Paris, Hachette.
- Peyron, Jacques (1975) : « L'église Saint-Julien-de-Montredon à Salinelles », in *Annales du Midi*, tome 87, no.121, pp.1-13.
- Poisson, Olivier (2006) : « Gailhan », in *Cahier de la Sauvegarde de l'Art Français*, no.19, Paris, Picard Éditeur, pp.70-72.
- Provost, Michel, et al. (1999) : *Carte Archéologique de la Gaul, 30/3, Le Gard*, Paris,

Académie des Inscriptions et Belles-Lettres (*CAG*) .

Raynaud, Claude et Fiches, Jean-Luc (1999) : « Sommières », in *CAG*, 30/3, pp.690-691.

Remensnyder, Amy G. (1995) : *Remembering Kings Past : Monastic Foundation Legends in Medieval Southern France*, Ithaca and London, Cornell University Press.

Rivals, Georges (1920) : *Histoire de Galargues le Montueux en Languedoc*, Nîmes, Lavagne-Peyrot.

Rivière, Jean-Claude et Sauveplane, Mireille (2014) : *Saint-Julien de Montredon à Salinelles (Gard) : Une restauration exemplaire*, Le Crès, a2c Éditions.

Shaffer, Jenny (2009) : « Une église du haut Moyen Âge à Psalmodi (Saint-Laurent d'Aigouze, Gard) et l'architecture préromane du Languedoc », in *Études héraultaises*, no.39, pp.5-18.

Werth, François (2013) : *Le patrimoine caché et méconnu en Languedoc-Roussillon*, Aix-en-Provence, Ouest-France.

Web-site

La base Mérimé : Église Saint-Étienne du Cailar.

<https://www.pop.culture.gouv.fr/notice/merimee/PA00103029> (2023.12.01 アクセス)